

陰徳有る者は必ず陽報有り

下野市教育委員会 文化課

一月二四日に「第九回下野市教育のつどい」が行われ、市内出身の小中高

等学校の児童・生徒の中から文化芸術・スポーツの分野で優秀な成績を残された、あるいは日頃の善行を認められた方々が表彰されました。受賞された皆さんおめでとうございます。その式典の際、来賓のご祝辞に「子供たちは下野市にとって宝です。」とお話がありました。この祝辞を拝聴しながら、ご列席の保護者の方々のお顔を拝見したところ、皆様満面の笑みを湛えていらつ

しやいました。この時の保護者の皆様は、まさに山上憶良と同じ心境のことに拝察させていただきました。この歌は、筑前（現在の福岡県の一部）国守（現在の県知事相当）時代、視察の途中に作ったものといわれており、子を思う親の気持ち素直に表現されています。この歌は反歌であり、この前に関連する歌があることは皆さんもよくご存知のことと思います。

子等を思ふ歌一首、また序
「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまし
て偲はゆ いづくより 来りしものぞ
眼交に もとなかかりて安眠し寝さ
ぬ」巻の五（八〇三）

この後に反歌

「銀も金も玉も何せむにまされる宝 子にしかめやも」巻の五（八〇三）と続きます。最初の歌の意味は、「旅先で瓜を出されて食べていると瓜が好物な子どもの顔が思い出され、次に栗を出されて食べると、いっそう子どもの顔が思い出される。子どもとはどこからやってきた賜物なのだろう。その顔がまぶたのうちに焼きついて、寝ることもできない。」

反歌
「金や銀やその他の宝物がなんだろうか。私にとって一番大切なのは子供なのだよ」と続くわけです。実に慈愛に満ちた人間の情愛が表現されています。万葉集には、柿本人麻呂、山部赤人を筆頭にして、男女の愛を歌った相聞歌が多数収められています。しかし、山上憶良の作品には男女の愛を歌ったものは無いといわれています。その代わりのように憶良は子どもを思う歌を多く残しています。万葉集巻二には、大宰府（現在の福岡県にあった九州を統括する役所で、現在の外務省的機能も併せ持った組織）時代に大伴旅人の催した宴会を中座する言い訳として即興で作ったといわれている歌が残され

ています。
山上臣憶良が宴より罷るときの歌一首
「憶良らは今は罷らむ 子泣くらむ
其も彼の母も吾を待つらむそ」巻の二（三三七）
「幼い子やその母が、私の帰りを今か今かと待っていますのでここで中座させていただきます。」上司に対するなかなか見事な言い訳です。年度末から年度初めの歓送迎会などで遅くなる世のお父さん方、憶良の言い訳を参考にしてみたいかがでしょうか。また、卒業・入学や転勤などでお子さんと離れて暮らす保護者の皆様、お忙しい時かもしれないですが、お子さんとの大切な時間を有意義にお過ごしただければと思います。

太宰府出土土瓦の文様



太宰府出土土瓦の文様

「陰徳陽報」・・・
『淮南子』人間訓（古代中国の故事）。意味は「人知れず善い行いをする者は、必ず誰の目にも明らかでない報いがある。」He that sows good seed shall reap good corn.（よい種を撒く者はよい麦を収穫する）。「陰徳陽報」は市内中学校のある部活動で「コッコ練習すれば必ず勝てる」と応援の横断幕にもなっています。